

## 美術鑑賞による被災地支援の可能性

(研究番号 26-818)

人間国宝美術館 館長代理兼学芸員 早川匡平

### 〈研究の目的〉

人間国宝美術館では、平成 26 年 4 月 5 日(土)と 6 日(日)、岩手県大船渡市で「出張美術館」を実施した。

出張美術館とは、近隣に美術館がない地域の学校や公民館といった公共施設に、館が所蔵する絵画や彫刻、陶磁器などの作品を約 100 点展示し、その場所を即席の美術館として地域の人々に本物の美術品を無料で鑑賞してもらう企画である。被災者支援と美術鑑賞の奨励、教育を目的に、神奈川県真鶴町の真鶴アートミュージアムとともに、平成 24 年より社会貢献事業の一つとして実施している。出張美術館の活動は、東日本を中心にこれまで全国 9 か所で開催した。

今回実施した岩手県大船渡市は、東日本大震災による津波で大きな被害を受けた地域の一つである。本研究は、出張美術館を通して、美術鑑賞が大船渡市の人々にどのように受け入れられたのかを調査し、被災地において美術鑑賞が人々の心の支援となりうるのか検証することを目的とする。

### 〈調査方法〉

本研究の調査方法は、開催当日に実施したアンケート調査と、聞き取り調査である。アンケートは、性別・年齢・認知媒体などの基本データとともに、美術への関心、美術館の利用頻度と利用目的、感想など、選択と記述を合わせ 13 項目とした。なお、大船渡市において 2 日間の開催期間で回収できたアンケートは、3419 名の来場者に対し 1639 枚であった。

アンケート調査と聞き取り調査の結果は、かつて出張美術館を開催した埼玉県狭山市(来場者：8034 人、アンケート：3086 枚)と福島県郡山市(来場者：1059 人、アンケート：424 枚)で同様に実施した調査の内容と比較をした。

### 〈調査結果〉

大船渡市での調査結果をほかの開催地での調査結果と比較をしたところ、注目したい項目は次の通りである。

#### ①認知媒体

出張美術館では、地元の方々の協力を得ながら広報活動を行い、新聞、テレビ、ラジオ、行政や民間の広報誌などの媒体で取り上げられることがある。

大船渡市において認知媒体として割合の高かったものは新聞と市の広報誌で、全体の 70%を占めた。これは狭山市においても同様の結果であった。両市ともテレビでも取り上げられ、インターネットでも早い段階から広報をしていたが、割合はわずかなものであった。各家庭に直接届く紙媒体がいかに広報手段として有力なのか思い知らされた。



大船渡市沿岸地域の様子(宿泊施設より撮影)



会場となった大船渡市民文化会館・図書館(リアスホール)

## ②美術館の年間利用回数

美術館の利用回数を0回と答えた人は、狭山市と郡山市では約20%であったが、大船渡市においては50%を占めた。1~2回と答えた人も含めると85%を超え、大船渡市の人々はほとんど美術館を利用することがなかったことが明らかになった。

利用しない理由として最も多かった回答は「近くに美術館がない」であった。大船渡市周辺には元々美術館がなく、美術館へ行くためには、盛岡市や一関市まで2時間以上かけなくてはならないとのことであった。お手伝いいただいた地元スタッフの方は、「大船渡は美術過疎」と言っていた。

## ③美術館の利用目的

美術館を利用する人の少ない大船渡市で、美術館の利用目的を尋ねると、「展覧会」を筆頭に、「学習・自己啓発」、「気分転換」と答える人が主であった。利用目的については、狭山市と郡山市でも同様の結果が得られた。

私が注目したいのは「学習・自己啓発」と「気分転換」という現状から変化を求めるために美術館を利用するという回答である。これらの回答を合わせると、3会場とも約40%を占めていた。変化を求める人々に何をどのように提供できるか、美術館にとってこれからの大きな課題であると考えている。

## ④美術への関心

美術に関心があるか尋ねたところ、大船渡市では95%の人が「ある」と回答した。

大船渡市での来場者数は、人口の約1割にあたる3400人以上となり、来場者数の人口に対する割合は、他の開催地と比べても高い。現地スタッフの方も、「大船渡の人たちがこんなに美術に興味があるとは思わなかった。」と驚いていたほどである。

これだけ美術への関心が高いにも関わらず、周辺に美術館がない理由はわからないが、少なくとも大船渡市においては美術鑑賞の需要は高いと感じた。

## ⑤聞き取り調査

狭山市や郡山市を含め、ほかの開催地では「作品を間近で見ることができてよかった」、「解説がわかりやすかった」、「また開催してほしい」という感想が大半しめる。一方、大船渡市ではこれらの感想とともに、「心が洗われた。」、「嫌なことを忘れることができた。」、「気分転換になった。」、「パワーをもらった。」、「美術品を見る機会がなく難しかったが楽しかった」という声を多く聞くことができた。

また、今回現地の人々と話をしながら感じたことは、他の会場と比べても明らかに皆熱心に作品を鑑賞し、表情や言葉に出して反応をしてくれたということである。このことは同行したほかのスタッフも同意見であった。

## 〈調査を終えて〉

私は常日頃、美術は世俗を離れた超俗的なものであると考えている。それは美術が人の心に強い影響を与えることがあるからである。

普段の生活や仕事があまくいかないとき、ふと出会った美術作品に感動し、心を奪われた経験をした人は少なくないはずである。美術はときに衣食住や経済活動には不必要なものだからと軽んじられることがある。しかし、美術作品に接したことで明日への活力に繋がったり、考え方が変わったり、人生の方向性が定まったりと、実生活に大きな影響を与えることさえあるのである。それゆえに美術には超俗的な力が備わっていると考える。

美術鑑賞が被災地の支援になりうるのかという問いに対し、被災地での出張美術館と調査は、大船渡市での1度しか実施していないので結論付けるのはまだ早いと思う。しかし、少なくとも大船渡市においては、今回の調査でも明らかになったように、東日本大震災で甚大な被害を受け、復興も道半ばの現状においても人々の美術への関心は高く、また一瞬でも現実を忘れて感動や変化を求めたいという心境からも、美術鑑賞への需要は高いといえる。

被災地の復興においてお金や物も確かに必要であるが、それ以前にそこに住む人たちの心に活力がなくては復興を成し得ることはできない。私たちはこの出張美術館を通し、被災者の心の支援ができるよう、今後も継続して活動していきたい。



会場の様子